２０２１．９．１

校長だより　２５

都立飛鳥高校校長　志波　昌明

全日制は２学期が始まりました。定時制は９月１０日（金）から前期期末考査です。少しずつ秋の気配が感じられますが、充実した活動ができるように、学習に部活動に励みましょう。

**全日制２学期始業式あいさつ**

みなさん、おはようございます。今日から２学期のはじまりです。

現在、パラリンピックが開催中です。本校の学校連携観戦はコロナウィルス感染拡大のため残念ながら中止にせざるを得ませんでした。でも、テレビの中継などで観ている人も多いと思います。もともとパラリンピックは第２次世界大戦で傷ついた兵士たちのリハビリのために始めたスポーツ大会がきっかけです。今回のパラリンピックでも、地雷などの戦争により傷ついた選手も出場しています。そこで、今日は、戦争と平和について話したいと思います。

８月は日本の敗戦により第二次世界大戦が終結した月です。テレビや新聞でも戦争についての特集が組まれていたので見た人もいると思います。最近気になるのはこのような番組の減少と戦争を体験された方の高齢化です。私の母親も東京大空襲で間一髪のところで命拾いをしていますが、そのように戦争を体験された方が少なくなってきました。このような状況のなかで、私や皆さんは戦争の恐ろしさ理解し、戦争のない世界を作っていかなくてはなりません。

私は８月に塚本晋也監督の『野火』という映画を観ました。この映画は、大岡昇平の小説を映画化したものです。太平洋戦争末期のフィリピンのレイテ島、日本軍はアメリカ軍の猛攻撃により、負け続けていきます。レイテ島でも銃の弾丸もなく、食糧さえもなく、島からも出られず、兵士たちは地獄のような世界に取り残されます。なぜ、弾丸や食料がないのかというと、末期は、日本軍の船は沈められ、日本からの物資は届かず、軍の上の人たちからは現地調達するようにとまで言われてしまうのです。毒のあるイモを食べて腹をくだしたり、現地の人を襲ったり、畑の作物を盗んだり、中には、亡くなった人の体を食べた記録も残っています。食べ物もない状態でジャングルをさまよい、あちこちから銃や大砲の弾丸が飛んできて、まわりの人たちの体がバラバラに吹き飛ばされていく。その中を主人公の田村一等兵はさまよい歩きます。原作者の大岡昇平さん自身も、兵士としてこの戦場におくりこまれ、アメリカ軍の捕虜になって生き延びます。

塚本晋也監督は、高校生の時に、この小説『野火』を読み、すでにそのころから映画を作っていた監督は、将来、ぜひ自分の手で映画化したいと思ったそうです。映画監督になった後も、常に映画化を考えていたところ、戦後６０年がたち、経験者が高齢化した上に、日本の社会のなかで、戦争に肯定的な意見や、日本軍をヒーローとして描く映画や小説が目立つようになり、危機感を感じ、今こそ『野火』を映画化しなくてはならないと制作したのです。

この映画が作られたのは今から７年前。大手の映画会社は制作せず、監督自身がお金を出し、自主制作の形で作られ、映画館も大きな映画館ではなく、全国のミニシアターの方たちがぜひ上映したいと協力して公開されました。それ以来、毎年８月には、都内のどこかのミニシアターで上映されています。戦争で亡くなるのは、私たちのような普通の人たちです。自分の意志は関係なく戦場に送り込まれ、死ぬ恐怖を感じるとともに、生きるために他人を殺す罪の重さも感じなくてはなりません。この映画を観ると戦争の恐ろしさがひしひしと伝わってきます。

SDGｓの１６番目の目標にも「平和と公正をすべての人に」とあります。世界中の人々が安心して暮らしていける社会を作るために、平和はとても重要です。しかし、戦争はなくなりません。世界のどこかで戦争が行われているのが現状です。

実際に私たちが何をできるのか。１人１人の力は小さいですが、すべての人々が戦争の恐ろしさを知り、戦争に反対することが、平和な社会を作るのではないかと思います。世界中のすべての人々が平和な社会で暮らせるように、平和な社会を考えていきましょう。

最後に、コロナワクチンについてお話しします。

コロナワクチンの接種状況で、少なくとも１回は接種した人は日本全体、今日現在で５６％になり、ワクチン接種が完了した人も４６％になっています。

コロナウィルスを抑え込むためにも集団での接種が大切です。また、外国のニュースなどを見ていると、飲食店や旅行、イベントにはワクチンの接種完了の証明書が必要になっており、今後、日本でも同じように証明書が必要になってくるでしょう。ワクチンの接種については、それぞれの意志にまかされていますが、コロナウィルスを抑え込むためにも接種を考えてください。